**金剛院**

金剛院は温泉津にある真言宗のお寺ですが、質素な漁村から石見銀山の物資の供給源となり、港町として栄えた温泉津の変貌を目の当たりにしてきました。寺院の記録によると、千の手を持つ慈悲の菩薩である千手観音菩薩像を安置するための聖域が町のどこかに建てられてた1337年から、温泉津には金剛院があるとされています。観音像は、少なくとも17世紀から現在の場所に安置されていると考えられ、1760年に再建された本堂の裏手にある墓地には、この地域で最も古い墓石を見ることができます。1561年になると、毛利家が細長い谷の河口に港と沿岸要塞を築き、温泉津が銀鉱山の主要な港になる道を開いています。寺院で使われている石の中には、日本海側の更に北に位置する北陸地方、現在の福井県周辺でしか採取できないものもあり、町が最も豊かだったとされる1600代後半よりも１世紀以上も前に、海岸沿いで海運が盛んだったことが伺える。墓地の入り口付近にあって、石の張り出しに囲まれた地蔵菩薩像の下には、周囲の石よりもやや濃い色の石が使われています。丘の中腹のさらに上にある円錐形の墓石は、金剛院の元僧侶の墓です。